3　歴史的環境

（1）時代区分

奄美群島は，北海道・沖縄県と同様に，いわゆる教科書的日本史とは異なる歴史を歩んだ地域である。その時代区分は複雑で，歴史学界における共通認識の時代区分が存在していないのが現状である。特に先史時代から琉球国統治時代に至るまでの考古学的時代区分は，沖縄考古学における時代区分が適用されることがある。

本計画書では，奄美博物館で採用している時代区分で説明を進めていく（表 12）。

奄美の歴史年表

日本歴史	歴史区分	奄美の時代区分	『名瀬市誌』時代区分	沖縄の時代区分
旧石器時代	先史	旧石器時代	奄美世	旧石器時代
縄文時代		縄文時代		貝塚時代前期
弥生時代		弥生時代並行期		貝塚時代後期
古墳時代		古墳時代並行期		
奈良時代	古代	古代並行期		
平安時代				
鎌倉時代	中世	中世	アジ世	グスク時代
室町時代		琉球国統治時代	那覇世	琉球王国時代
安土桃山時代				
江戸時代	近世	薩摩藩統治時代	大和世	
明治時代	近代	明治時代		明治時代
大正時代		大正時代		大正時代
昭和時代		昭和時代		昭和時代
	現代	米軍占領統治時代	アメリカ世	米軍占領統治時代
		昭和時代		昭和時代
平成時代		平成時代		平成時代
令和時代		令和時代		令和時代

表 12　奄美群島の時代区分

（2）先史

①旧石器時代

旧石器時代は，約 30,000 年前に噴火・降灰した姶良丹沢火山灰の堆積層が，土浜ヤーヤ遺跡（奄美市笠利町），喜子川（きしかわ）遺跡（奄美市笠利町），ガラ竿（ぞう）遺跡（伊仙町）等で確認され，その下層から遺跡が確認されている。人骨等は確認されていないが，旧石器時代には人類活動が奄美群島でも開始されたことを示している。

写真 18　旧石器時代の礫群（喜子川遺跡）

②縄文時代

縄文時代は，沖縄島まで広義の縄文文化圏に含まれるが，先島諸島では縄文文化とは異なる独自の文化が営まれていた。奄美群島における縄文時代開始期の様相は，暫くは約 6,000 年～7,000 年前の前期段階までしか確認できていなかったが，平成 28 年（2016），徳之島の下原洞穴（したばるどうけつ）遺跡（天城町）から約 13,000～14,000 年前に位置づけられる隆起線文（りゅうきせんもん）土器が発見され，草創期にさかのぼることが明らかとなった。

約 10,000 年前に氷河期（最終氷期）が終わり，温暖化に伴う海水面の上昇が続いた。約 7,000 年前には「縄文海進」と呼ばれる海水面の上昇がピークを迎え，日本列島の各地で海水が陸地深くまで浸水しはじめる。奄美群島では，現在の海岸線より後方に縄文時代前期～晩期頃の遺跡が分布す

る海岸砂丘（古砂丘）が形成される。

定住化がはじまったのは約3,000年前の縄文時代晩期後半～終末にかけてであり，ハンタ遺跡（喜界町），宇宿貝塚（奄美市笠利町），宇宿小学校遺跡（奄美市笠利町），城（ぐすく）サモト遺跡（奄美市住用町），塔原（とうばる）遺跡（天城町），住吉（すみよし）貝塚（知名町），上城（うわいぐすく）遺跡（与論町）等で住居跡が複数確認される事例が見られ，大型石皿や磨製石斧，骨角器や貝製品・石製品等の多様なモノが出現した南島的特徴をもった縄文文化が展開した。

写真 19　石組み竪穴住居跡（城サモト遺跡）

③弥生時代並行期

北海道を除く本州では，弥生時代に大陸から伝来した農耕が地域によって時間差はあるものの拡散し，農耕を示す遺物も確認されるようになる。南西諸島においては，種子島・屋久島までは稲作農耕文化が一部，定着しているが，トカラ列島以南の島嶼地域では稲作農耕文化の証拠を示すものが確認されておらず，縄文時代に引き続いて漁撈採集が中心となる社会が営まれていたと考えられている。

弥生時代の九州地方では，政治的社会の有力階層者はゴホウラ・イモガイ等の貝製装身具を着用していたことが認識されている。

貝製装身具の原材料となる貝殻は，種子島・屋久島以南の島嶼地域で得ることができ，遠隔地交易で入手していたとされている。それを示す遺構として，沖縄諸島では，ゴホウラ・イモガイを意図的に集めたいわゆる貝殻集積遺構と呼ばれる遺構が確認され，これに伴い在地土器や九州地方で製作された弥生土器が確認される事例が目立つようになる。一方で，奄美群島では，現在のところ，貝殻集積遺構は確認されていないものの，九州地域の弥生土器と共に，その器形を模倣し，在地で製作した土器がアヤマル第２貝塚（奄美市笠利町），土盛マツノト遺跡（奄美市笠利町），宇宿港遺跡（奄美市笠利町），和野長浜金久遺跡（奄美市笠利町），喜瀬サウチ遺跡（奄美市笠利町），西原海岸遺跡（和泊町）等で確認されている。特に，アヤマル第２貝塚と宇宿港遺跡，喜瀬サウチ遺跡では，搬入品の可能性が高い磨製石鏃が見つかっている等，奄美・沖縄地域と九州地域の間で，社会的な交流が続いていたと認識されている。

写真 20　ゴホウラ製貝輪
（土浜イャンヤ洞穴遺跡）

約3,000～1,000年前頃になると，気候が寒冷化したと考えられ，それに伴い「弥生の小海退」と呼ばれる海水面の低下が認められ

る。この時に形成されはじめた海岸砂丘が現在の海岸線に発達している砂丘（新砂丘）であり，弥生時代以降の遺跡が多数確認されている。

④古墳時代並行期～古代

弥生時代における農耕社会の形成は政治的社会の発展へ繋がり，続く古墳時代には近畿地方に大和政権が誕生し，北は岩手から南は鹿児島（主に大隅半島）までの地域に古墳文化が波及した。一方で南西諸島には，古墳の造成は認められず，弥生時代に引き続き，貝製装身具の素材となるゴホウラ・イモガイ等の南海産大型貝類を介した遠隔地交易が，奄美群島以南の島嶼地域と行われていた。

古墳時代並行期後半頃になると，ゴホウラ・イモガイ等に代わってヤコウガイの利用が目立つようになる。用見崎遺跡（奄美市笠利町），土盛マツノト遺跡，小湊フワガネク遺跡では，当該期におけるヤコウガイが大量に出土した遺跡として注目されている。

特に小湊フワガネク遺跡からは，掘立柱建物跡・炉跡・貝製品集積遺構等の遺構，多量の当該期の在地土器（兼久式土器）・搬入土器（土師器等）・ヤコウガイ製品・イモガイ製貝札等を含む多様な貝製品等の人工遺物や，食料残滓の魚貝類・甲殻類・獣骨等の自然遺物も確認されている。このため，当該期における生業活動，食料資源を解明するための遺跡として注目すべきものであり，弥生時代並行期に引き続いて，漁撈採集社会が営まれていた様子を理解することができる。

宇宿貝塚及びその周辺遺跡からも，当該期のスセン當式土器・兼久式土器は確認されているが，出土数も僅少で，遺構等も伴っておらず，その様相は判然としない。

写真 21　ヤコウガイ集積遺構（小湊フワガネク遺跡）

『日本書紀』,『続日本紀』には，７～８世紀にかけて，律令国家による地方統治政策が薩南諸島を中心とする南島地域まで展開されていた様子が記載されている。日本の文献における奄美群島や琉球諸島の初出となる。また太宰府跡（福岡県）から，「掩美嶋」（奄美大島）「伊藍嶋」（沖永良部か）の島名が記載された８世紀前半（奈良時代）の木簡も発見され，文献史料の記載を裏付けるものとして重要である。

しかし，考古学側では奄美群島・琉球諸島で平安時代まで貝塚遺跡が営まれ，社会の代表を中央政府に派遣するような政治的社会は形成されていないと理解されてきた。奄美大島では，小湊フワガネク遺跡や土盛マツノト遺跡のように，生業活動の中心は漁撈採集であるものの，鉄器を所有し，ヤコウガイを主体とした貝製品の集中的生産をしていた「ヤコウガイ大量出土遺跡」が確認され（写

真 21)，当該期の島嶼社会が漁撈採集社会に留まらなかった可能性が再検討される契機となった。

（3）笠利地区の縄文時代

先史時代人の足跡は後期旧石器時代からたどることができるが，続く縄文時代草創期及び早期の様相は判然としない。南九州の国史跡・栫ノ原（かこいのはら）遺跡（南さつま市）等で草創期の文化層から出土している磨製丸ノミ型石斧と類似する石斧が，笠利地区から数点確認されているものの，いずれも出土状況が不明であり，時期の特定はできていない。現状では，縄文時代のもっとも古い生活の痕跡が確認できる遺跡は，早期に位置づけられる爪形文土器が出土した喜子川遺跡，宇宿高又遺跡，土浜イャンヤ洞穴遺跡（奄美市笠利町）である。

サンゴ礁が未発達だった早期から中期は，獲物を求めて移動する生活が中心であったと考えられる。縄文時代を通じて重要だった陸上の動物タンパク源はリュウキュウイノシシで，またウミガメ等も食料としていた。本土の縄文時代の重要な動物タンパク源であった鹿は，奄美・沖縄では 2 万年以上前に絶滅しており，縄文時代には生存していなかったと考えられている。宇宿小学校遺跡では前期の文化層から犬の埋葬遺構が確認されており，当時から犬が狩猟犬として大事な存在であったことがうかがえる。

写真 22　犬の埋葬遺構（宇宿小学校遺跡）

植物性の食料資源として重要な位置を占めていたのはシイの実である。宇宿貝塚では後期の土坑や晩期の竪穴住居跡内から炭化したシイの実が多く検出されている。シイの実等をすりつぶすための道具である石皿や磨石等の石器も後期から晩期の遺跡で多く出土している。また，蒸し焼き料理のための調理施設と考えられる集石遺構は，喜子川遺跡の旧石器時代の層からも確認されているが，万屋下山田（まんや しもやまだ）遺跡（奄美市笠利町）等の後期の遺跡でも多く確認されており，長期にわたって利用されていた調理方法の一つであったことが理解できる。

サンゴ礁が発達してくる後期になると，サンゴ礁内で採れるヤコウガイ・チョウセンサザエ・マガキガイ等の貝類やブダイ・フエフキダイ・ベラ等の魚類が主要な食料に加わり，定住生活が可能になってきたとみられ，貝塚が形成され始めるのもこの頃からである。

笠利地区において，竪穴住居跡が確認されるのは後期に入ってからで，長浜金久遺跡から 1 基確認されたほか，宇宿小学校遺跡では後期のものとみられる掘立柱建物跡 1 基，宇宿貝塚からは貯蔵穴とみられる土坑群も見つかっている。晩期になると，竪穴の四方に人頭大の石を積み上げる方形

の竪穴住居跡が出現する。宇宿小学校遺跡では少なくとも７基，宇宿貝塚でも２基確認されている。石組みの竪穴住居跡は奄美・沖縄の後期から弥生時代前期にかけてみられる地域的特徴をもつ住居形態で，床面から柱穴が見つからないものが多く，本来は石壁がある程度の高さまで立ち上がり，その壁が屋根を支える構造であったと考えられる。ウフタⅢ遺跡（龍郷町）では，壁が 80cm 近くまで立ち上がった状態で残存する弥生時代前期並行期頃と考えられる竪穴住居跡も確認されている。このような形態の住居構造は，日本本土では確認されていない。住居のサイズは，１辺が２ｍ台の小規模のものが多いのも特徴である。

また，九州本土の轟式系土器の影響を受けた条痕文土器や，九州西海岸部を中心に広く分布する曽畑式土器の影響を受けた土器が宇宿高又遺跡やケジ遺跡（奄美市笠利町）等から出土していることから，本土との交流は少なくとも前期から確認できる。下原洞穴遺跡や三角山Ⅰ遺跡（中種子町）等では，草創期に位置づけられる隆帯文土器が確認されているが，現在のところ，奄美大島では確認されていない。

後期から晩期には，九州本土から持ち込まれた黒曜石が宇宿貝塚を始め，複数の遺跡で確認されている。また，主に東北や北陸等に分布する底面にＸ字状等の加工を施した石皿と同タイプの石皿が宇宿貝塚及び宇宿小学校遺跡で確認されている点や，工字文などの文様を特徴とする東日本系土器が，ウフタⅢ遺跡や手広遺跡（龍郷町）等で確認されている点も特筆される。

（４）中世

日宋貿易の開始以降，九州南方海域を指すと考えられる「キカイガシマ」の名称が，史料に現れる。同時期の 11 世紀代に，奄美群島では農耕が開始され，九州地域の土師器・須恵器・滑石製石鍋・滑石混入土器・焼塩土器（布目圧痕土器）・高麗の無釉陶器・宋の白磁・越州窯青磁等の搬入遺物が多数出土し，大規模な掘立柱建物群が確認された国史跡・城久遺跡（喜界町）や高麗無釉陶器に技術的系譜を持つ陶器の生産が行われた国史跡・徳之島カムィヤキ陶器窯跡（伊仙町）等が確認されている。奄美群島に出現したこれらの遺跡の中世的容器組成は，琉球列島にも波及し，沖縄の時代区分で用いられるいわゆる「グスク時代」開始の契機となるものである。

中国が，宋，元，明と大国の興隆と滅亡を繰り返す激動の時代を迎えていた時期，13 世紀末頃から沖縄島には世界文化遺産に登録されている大型城塞型グスク群が出現しはじめる。奄美群島では，国史跡・赤木名城跡をはじめとする本土地域の中世山城型の城郭遺跡が奄美大島を中心に構築されるようになる。

写真 23　埋葬遺構（万屋グスク遺跡）

宇宿貝塚が所在する宇宿地区と周辺には，このような城塞型グスクの構築は認められていないが，宇宿貝塚や近接する宇宿ダンベ山遺跡，万屋グスク遺跡では，同時期の土坑墓が確認されている（写真 23）。また，宇宿貝塚と万屋グスク遺跡では，用途不明のＶ字状の溝も確認されている。さらに万屋グスク遺跡では，庭園や池の跡も確認されており，このような遺跡からは，須恵器・滑石製品・滑石混入土器・白磁・青磁・カムィヤキ等が確認されている。

大型城塞型グスク群が出現した沖縄島で，山北・中山・山南の三按司が勢力を広げ，明に朝貢しはじめた直後の永享１年（1429 年）に「琉球国」が誕生した。

（５）琉球国統治時代以降

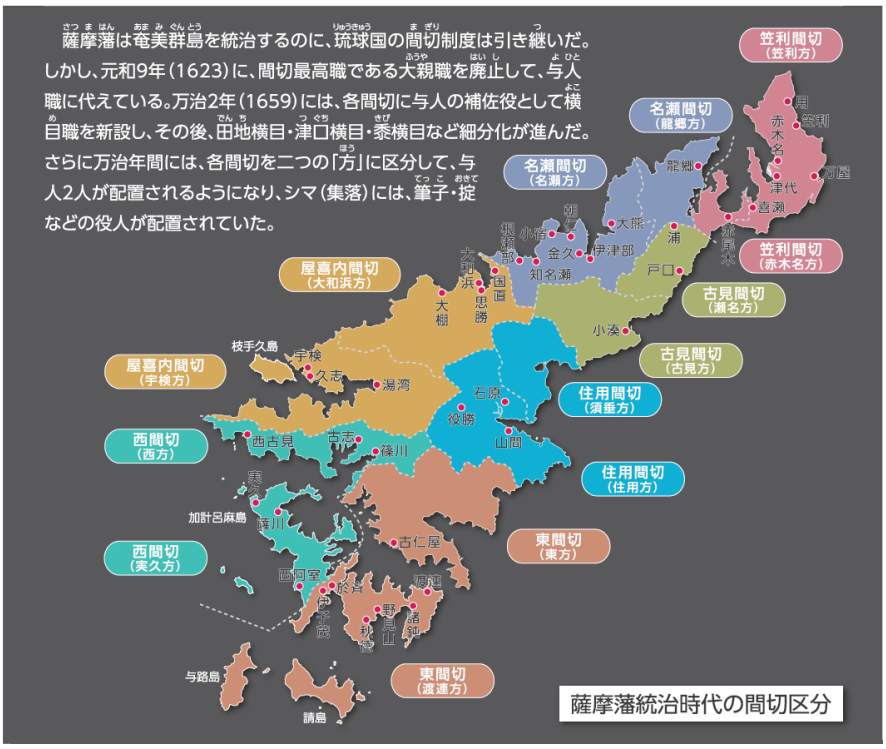
①琉球国統治時代

奄美群島は，15 世紀中葉頃から 17 世紀初頭まで，琉球国の統治下に置かれていた。琉球国の地方行政制度である「間切」が施行され，奄美大島は７間切（笠利間切・古見間切・名瀬間切・住用間切・屋喜内間切・東間切・西間切）に区分された。琉球国の奄美大島統治の拠点は，大笠利集落（奄美市笠利町笠利）に置かれていたと考えられている。

②薩摩藩統治時代

薩摩藩による慶長 14 年（1609）の軍事侵攻の結果，奄美群島は，琉球国の統治下から事実上分離され，薩摩藩の直轄地域として支配されるようになる。琉球国が施行した間切制度は引き継がれ，元禄年間（1688 年～1703 年）には，笠利間切（赤木名方・笠利方），古見間切（古見方・瀬名方），名瀬間切（龍郷方・名瀬方），住用間切（住用方・須垂方），屋喜内間切（大和浜方・宇検方），東間切（東方・渡連方），西間切（西方・実久方）の７間切 14 方で構成されていた。

現在の笠利地区は，薩摩藩統治時代における笠利間切で構成されている。笠利間切は，笠利方（屋仁・佐仁・用・笠利・手花部・喜瀬・用安の７集落）と赤木名方（辺留・須野・宇宿・万屋・節田・平・赤尾木・芦徳・里・赤木名の 10 集落）に区分されていた。



薩摩藩統治時代の間切区分

図 13　薩摩藩統治時代の間切区分

③近代

享和１年（1801）に，薩摩藩の仮屋が名瀬の伊津部に移転されると，官公庁の変遷に伴いながら寄留商人を中

心に名瀬の街の形成が始まる。明治政府による明治４年（1871）の廃藩置県後，薩摩藩は「鹿児島県」となり，明治８年（1875）に名瀬の伊津部仮屋が廃止され，新たに「大島大支庁」が名瀬金久村に設置されるのである。それ以後，昭和時代になるまで鹿児島県の島嶼地域をめぐる行政管轄区域の編成は何度も繰り返され，複雑に変遷した。

明治 12 年（1879）には郡区町村編制法の施行に伴い，奄美群島は大島郡として鹿児島県大隅国に編入され，大島郡役所が名瀬金久村に設置された。旧来の間切制度を踏襲する形で，間切の下部に置かれた「方」は，小区として移行した。小区には戸長が置かれることになり，島役人の与人が戸長に任命されている。

明治 41 年（1908），島嶼町村制が施行され，トカラ列島は十島村に，奄美大島は笠利村・龍郷村・名瀬村・住用村・大和村・焼内村・西方村・東方村・鎮西村・実久村の 10 箇村が成立した。笠利方の内，赤尾木村と芦徳村は，これにより，龍郷村に編入されることとなった。島嶼町村制は，大正９年（1920）に廃止された。

④米軍占領統治時代～現代

日本敗戦により，昭和 21 年（1946）に南西諸島の北緯 30 度以南の島嶼は，アメリカ占領軍沖縄海軍軍政府の行政統治下に入る。同年，名瀬町は市制を施行して名瀬市となり，北部南西諸島軍政府が開設された。

図 14　米軍占領統治下の南西諸島の日本返還過程

昭和 27 年（1952）２月 10 日，北緯 29 度以北の十島村が日本に復帰した。昭和 26 年（1951），奄美大島日本復帰協議会の発足を契機に，奄美群島全域で日本復帰に向けた住民運動が展開されはじめ，昭和 28 年（1953）12 月 25 日に奄美群島は日本復帰を果し，ふたたび鹿児島県となった。

北緯 27 度以南の琉球諸島（沖縄諸島・先島諸島）が日本に復帰したのは，奄美群島の日本復帰から 19 年後の昭和 47 年（1972）５月 15 日である。

日本復帰後の昭和 36 年（1961），笠利村は，円滑な自治行政の伸展と産業，経済，文化の飛躍的発展の推進，住民による振興意欲の増進，生活の安定を目的に町制を施行して笠利町となり，奄美空港の着工，笠利崎灯台設置等，開発の進行がみられるようになった。そして，平成 18 年（2006），名瀬市・住用村・笠利町の３市町村が合併，「奄美市」が誕生して今日に至る。

平成 15 年（2003），奄美群島は日本復帰 50 周年の節目を迎え，平成 25 年（2013）に日本復帰 60

周年，平成 30 年（2018）に日本復帰 65 周年の記念行事が行われている。また，令和５年（2023）には日本復帰 70 周年記念を迎える。

（６）古地図にみる宇宿

幕末，アジアに進出してきた欧米諸国に対して，江戸幕府は，天保 13 年（1842）及び嘉永２年（1849）に「海岸防備」の強化を図る施策を打ち出し，全国諸藩に海岸絵図の作成を命じている。

奄美大島においても，嘉永４年（1851），「英夷」からの防衛を図るために海岸防備図の作成が進められた。薩摩藩の上級藩士・名越左源太が奄美大島に遠島されていた嘉永５年（1852），琉球国の勤務経験もある汾陽次郎右衛門が率いる一行が作成した奄美大島の精密な地図が「大島古図」と呼ばれる海岸防備図である（図 15）。

この「大島古図」の笠利間切笠利方の箇所には，現在の宇宿集落及び万屋集落がある位置に「宇宿村」「萬屋村」と記載がある。海岸には，「亀瀬」の表記も確認することができ，宇宿集落で，「フースィ岩」と呼ばれている大きな岩であると考えられる。さらに，小舟が出入りする河川についての記述もあり，現在より川幅は広く，水深も深かったと考えられる。

また，「大島古図」中には，現在の城間集落についての記載はなく，土盛集落については，人家が 15 軒ありとの記述が認められる。他にも，土盛に異国人上陸との記述もあり，土盛集落では，現在でも伝承として残されている。

図 15 「大島古図」（鹿児島県立図書館所蔵）における笠利間切笠利方